



10
2016, Oct

No. 735

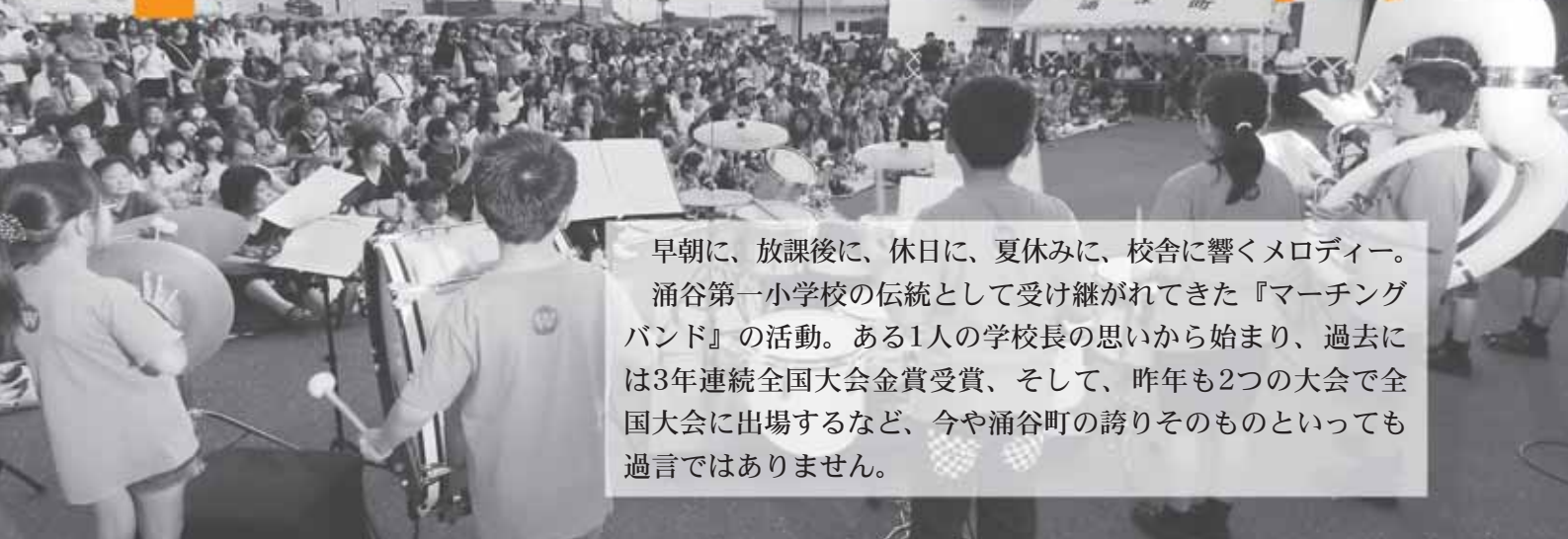


つなぐのはたすきと熱き思いー

涌谷第一小学校

マーチングバンドの

響



早朝に、放課後に、休日に、夏休みに、校舎に響くメロディー。涌谷第一小学校の伝統として受け継がれてきた『マーチングバンド』の活動。ある1人の学校長の思いから始まり、過去には3年連続全国大会金賞受賞、そして、昨年も2つの大会で全国大会に出場するなど、今や涌谷町の誇りそのものといっても過言ではありません。

涌谷第一小学校マーチングバンドの黎明期を、当時指導していた伊藤ひろ子さんに伺いました。

始まりは、平成2年までさかのぼります。当時の力山敏校長が、古川総合体育館で開催された大崎地区小中学校教育研究会で見た鹿島台小学校の児童の演奏に大いに感銘を受けたそうです。

「いきいきと音楽活動に取り組み、一人ひとりが自分を高めていけるような人間になってほしい」。その願いから始まった涌谷第一小学校のマーチングバンド。

平成2年4月に小野寺新教諭と伊藤ひろ子教諭が赴任し幕開けしました。始めは、2人の教諭と3人の児童だけで毎朝音楽室に集まり、マウスピースで呼吸法などを練習するものだったそうです。

平成3年3月に、力山

校長が退職される際に、退職金でトランペットやトロンボーンなどの楽器一式を寄贈し、翌4月からは、特別音楽クラブのメンバーが34人に大幅増加。その年の運動会や遠田郡音楽祭に参加するまでに活動が拡大しました。

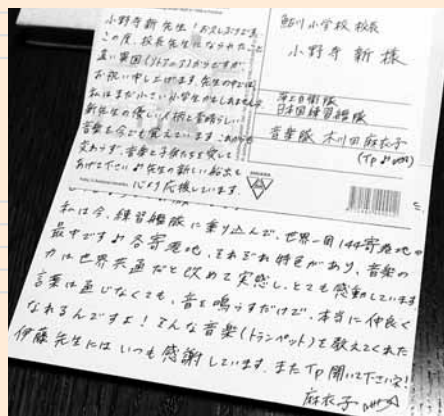
平成4年には、メンバーが40人となり、学校内部の理解も得られ、公式大会「古川地区マーチングフェスティバル」に初参加。「初参加までの2年間、学校の理解を得るほかに、教育研究会をとおして他校の担当者と連携して涌谷第一小

学校のマーチングバンドを育てました」と苦労を思い起こします。

現在まで受け継がれてきた背景に、もう一つの力山校長の願

いがありました。

「涌谷第一小学校を長きにわたって盛り上げていくため、指導は複数人で担当し、1人が転動しても必ず残ったもう1人が新しく来た担当者を育ててから転動すること」。その児童を思う当時の校長の2つの願いが、賛同した2人の教諭を突き動かし、今でも町民に、宮城県・東北の人々に、そして、全国の人々に大きな感動を与えるまでの音楽を涌谷第一小学校で、奏で続けています。



▲伊藤教諭と小野寺教諭に指導を受けた卒業生の一人が、海上自衛隊日本国練習艦隊の一員として全世界で活躍中。



(右) 大内奈宜沙さん(5の2区)
アルトホルン担当
(左) 出山恵さん(東京都)
ユーフォonium担当

黎明期に活動していた初代メンバーの2人に、当時の様子を伺いました。

「4年生の時、元々管楽器を触ってみたいという憧れを持っていたところに、卒業式で演奏をするという企画があると聞き参加することになりました。卒業式だけと聞いていた活動が続いて、伊藤ひろ子先生と小野寺新先生の指導のもと、小学校の5年生6年生を特別音楽クラブの活動に捧げました」と苦笑い。

当初はマウスピースでブレスやスタックカートなどの呼吸・演奏方法だけを練習。カ山校長によって楽器が寄贈され、特別音楽クラブの活動が本格始動し、平日は朝と夜に、土曜日は授業後の午後にと、練習に明け暮れる日々

に突入しました。衣装も運動着であつたり恵まれた環境ではなかつたそうです。しかし、誰一人として辞めることはなかつたそうです。

「練習は本当に厳しいものでしたが、伊藤先生の指導力に引き込まれ、のめり込んでいきました。賞をとりたい、もつとうまくなりたいなど、どん

どん食欲になつていきました」。

また、マーチングが現在まで続いているのは、先生方が築いた基礎にあると話します。

「マーチングを根付かせるための苦労は大変なものだったと思います。保護者の理解を得るために楽器を持ち帰って親に聴かせたりしました」。

当時の話の端々に、指導者に対する大きな感謝がにじみます。「礼儀や気持ちの面など、今の自分の基礎が作られました。中でも諦めない力を養ってくれた先生方の指導力に感謝します」。



▲平成4年の運動会で、初演奏。衣装は全身体操着。

【浦谷第一小学校マーチングバンドの活動の軌跡】

平成2年4月	小野寺教諭、伊藤教諭赴任。活動準備を開始。	平成18年	マーチングバンド東北大会(宮城県)出場。
平成3年3月	カ山校長退職。楽器を寄贈。	平成19年	マーチングバンド全国大会(大阪府)に出場し、金賞受賞。
平成3年4月	音楽クラブのほか、特別音楽クラブとして活動。運動会や遠田郡音楽祭に参加。	平成20年	マーチングバンド全国大会(千葉県)に出場し、金賞受賞。
平成4年10月	第3回古川地区マーチングフェスティバル(古川総合体育館)に初参加。	平成21年	マーチングバンド全国大会(千葉県・大阪府)に出場し、ダブル金賞受賞。全国大会金賞三連覇。
平成7年	特別音楽クラブマーチング東北大会出場。	平成22年	マーチングバンド東北大会(宮城県)出場。
平成9年	マーチングバンド全国大会(兵庫県・群馬県)出場。	平成23年	マーチングバンド東北大会(岩手県・山形県)出場。
平成10年	マーチングバンド東北大会(山形県・宮城県)出場。	平成24年	マーチングバンド全国大会(大阪府)出場。
平成11年	マーチングバンド東北大会(宮城県)出場。	平成25年	マーチングバンド東北大会(秋田県・宮城県)出場。
平成12年	マーチングバンド東北大会(宮城県・岩手県)出場。	平成26年	マーチングバンド東北大会(福島県・宮城県)出場。
平成13年	マーチングバンド全国大会(兵庫県)出場。	平成27年	マーチングバンド全国大会(大阪府・埼玉県)出場。
平成14年	マーチングバンド東北大会(山形県)出場。		

今も心に響くマーチングの日々

厳しい規律が当時の強さであり、

今の自分の基礎。

川崎麻未さん(19歳・2の1区)



麻未さんは小学2年生から所属。最初はガード、小学3年生からトランペットを担当し、6年生ではバンドリーダーを務めました。

小学3年生の時に、現在も涌谷第一小学校で指導する永山典子先生が赴任。1年目の成績は、金賞だったものの、全国大会には出場できない「ダメ金」。しかし、その後の3年間は、全国金賞で、最後の年は2つの大会で金賞受賞という快挙を達成しました。

「あのころのマーチングのコンセプトは『聴いてくれる人に感動を、元気を与える。明るい音楽を届ける』というものでした。3年連続金賞受賞への周囲の期待が膨らむ中、賞にはとらわれないという永山先生が言い続けるそのコンセプトを貫いたことで、結果がついてきたんだと思います」。

また、3連覇には、親の会の存在も大きかったそうです。「楽器運搬や弁当の手配のほか、演奏の審査にもつながる小道具や衣装も、親の会で製作し活動を支えました」と麻未さんのお母さんが隣で当時を懐かしんでいました。

そのほかにも、春に行われる他校や一般バンドとの零石での1泊2日のワークショップや夏休み期間の屋外練習など、マーチングバンドに明け暮れた日々をありありと話してくれました。

「『ぶれない、周りに流されない、他人に負けたくない、もつと頑張れる』という今の自分の基礎は、マーチングで作られました。演奏技術だけではなく、日常生活から演奏を見る人に感動を与えるという精神までを、高学年が低学年に教えるという厳しい規律がありました。それが、当時の強さの秘訣だったと思います」。

マーチングで培われた強さを持つ麻未さんは、この夏から1年半、海外に留学。

最後に「今マーチングに取り組んでいる子どもたちも、まずは永山先生を信じることに。そして、夏休みがなかったらとつらいかもしれないけれど、マーチングを始めたときの楽しいと思う気持ちを忘れないで続けてほしい」とエールを送ってくれました。

最後に「今マーチングに取り組んでいる子どもたちも、まずは永山先生を信じることに。そして、夏休みがなかったらとつらいかもしれないけれど、マーチングを始めたときの楽しいと思う気持ちを忘れないで続けてほしい」とエールを送ってくれました。

(写真右)

大阪城ホールという大舞台上で凛として堂々と演奏する麻未さんの姿勢から、当時の強さがにじみ出します。

(写真左)

「お客さんにショックを与える」と書きこまれた当時の楽譜。マーチングバンドのコンセプトがしっかりと浸透しています。



残響

創設から約25年。多くの児童と指導者、保護者、地域の支
その間、マーチング界において、涌谷第一小学校ありと言わ
そして、実績とともに、経験した人だけに響き続けてきたも

澤田陽希さん(20歳・11区)



限界という壁を自分で作らない。
だから、挑戦し続けられる。

陽希さんも小学2年生から所属。所属した当初からアルトホルンを担当し、6年生ではバンドリーダーを務めました。5年生、6年生の時に全国大会で金賞を受賞。

「夏休みの間などは一日中練習の日々で、大変でしたが、今となつては一番充実していた日々でした。そのマーチングの経験によって、人間関係の築き方、積極性、辛い環境の中でもがんばれる意志といった今の自分を培うことができました。『これで良いと思わない。自分で壁を作らない』と

いう永山先生の教えのおかげで、いろいろなことに挑戦し続けてこれました。』

そう話す陽希さんは、中学校では吹奏楽部に入部し、中学3年生のときに、顧問と話し合い「マーチング」に挑戦。結果は、1年間限定の活動の中で、東北大会出場という大きな結果を残しました。その後、石巻高校に進学し、吹奏楽部に所属。東日本大震災で被災したあと、劇団四季出身・友右竜也氏の被災地支援コンサート「明日の力」に携わったり、「マーチング」で身につけたダンスを定期演奏会に初めて取り入れ、披露するなど、積極的に挑戦し被災者に元気と笑顔を届けてきました。その根底にあるのが、もう一つの永山先生の教え『良い演奏を届けることで結果がついてくる』。

現在は、看護学校に通いながら「TOMODAC」[18]「災害看護研修プログラム2016」という国内の災害医療や看護の更なる発展を目指す事業に挑戦しています。

また、「涌谷第一小学校」が大きな成績を残せたのは、永山先生を中心に、十分な練習をできる環境があつたからです。毎日の送り迎えをしてくれる家族や朝から晩までの毎日の練習を見守ってくれた地域の皆さん。そして、『みんなでがんばろう!』と支え合える仲間がいました。中でも、お互いに支え合える仲間は自分たちの財産になるので、成績だけを追うのではなく、粘り強くがんばっていつてほしい」と自身の経験を基に、現在マーチングに取り組む児童の皆さんに向けた励ましのメッセージを話しました。

(写真右)

大会時の集合写真の一枚。緊張する場面でも笑顔でいる様子から自分たちへの自信と互いの信頼関係、仲の良さが伺えます。

(写真左)

陽希さんの卒業する際の寄せ書き。バンドリーダーを務めた陽希さんの人望の厚さを感じさせる言葉が書き込まれています。



マーチングバンドの基礎

マーチングバンドのド・レ・ミ



マーチングバンドとは、吹奏楽活動の演奏形態の1つです。

演奏をしながら、その曲に合わせて演奏者が行進し、音楽とともに観衆を魅了します。

マーチングバンドは、トランペットやトロンボーン、アルトホルンなどの『管楽器(左)』と、スネアドラムや木琴などの『打楽器(右)』に、フラッグやダンスによって楽曲のストーリー性にアクセントを付ける『カラーガード(中)』で構成されます。



マーチングバンドは、楽器の演奏だけが優れていれば良いわけではありません。

各マーチングバンドごとに演奏テーマを設定。管楽器・打楽器が演奏しながら動作し、カラーガードがダンスを添えることで、そのテーマの世界観を表現します。一連の動作を「ドリル」ともいいます。

その「ドリル」において、演奏と動作の「調和」がとれていることが、審査の際に重要となります。通常、楽器を吹きながら歩くことだけでも非常に困難なことです。楽器を持つ姿勢や一体感のある行進など、「調和」の完成度を高めるために、練習が繰り返されます。

また、世界観を表現するために、衣装や小道具、大道具などもコンテストでは重要な評価の対象となります。



▲ベテラン組同士、互いに厳しくチェック

お兄ちゃんとお姉ちゃんがマーチングバンドで活動していて、その話を聞いて楽しそうだったので参加しました。楽譜が読めたり演奏できたときの達成感がマーチングの楽しみです。6年生からはバンドリーダーをしています。みんなをまとめる役割は大変ですが、6年間の集大成としてまずは県大会を突破できるようにしたいです。



小泉亮介くん(6年生・マーチング歴6年・バンドリーダー・トロンボーン担当)



▲初心者を引っばるベテランのドリル

1年生のとき、学童クラブにいとマーチングの音が聞こえてきて、「自分も演奏できるようになれたら」という憧れから参加しました。部長として初心者へのメンバードリルを教えるのは大変ですが、教えることで自分自身も上達できています。大会では、自分はもちろん、全員で演奏を間違わないようにしたいです。



當摩拓海くん(6年生・マーチング歴6年・部長・トロンボーン担当)



▲大きい音を出すため、自発的に筋トレ

マーチングの活動を見ていて、自分も楽器に触ってみたい、演奏してみたいと思ひ、今年の春、参加しました。参加してみても、楽器から音が出るようになったり、ドリルの動きが合わせられるようになったりと、夏休みの間にできることが多くなり、ますます楽しくなってきました。初めての大会で緊張するけどがんばります。



早坂咲乃さん(4年生・マーチング歴半年・トランペット担当)

かぶりの響か 交響

互いに響き合い磨かれていく力

昨年、2つの全国大会に出場した涌谷第一小学校マーチングバンド。主力となっていた6年生が卒業し、今年の春は、9人の体制でスタート。大きな岐路に立たされた中、先生方がメンバー募集の呼びかけを行い、現在26人に。今年のテーマは、「Climb Every Mountain ~すべての山へ登れ~」。ベテラン組が新メンバーを引っばり、新メンバーも夏休み中の厳しい練習に耐え、互いに励まし合いながら、この秋、一丸となって大きな山に臨みます。

音記号

響育

音楽をとおして人を育てる

マーチングバンドは、音楽の活動ですが、その厳しい練習が、マナーや規律、人間性、意欲を育みます。

今年で涌谷第一小学校に赴任して11年目を迎え、多くの実績を残してきた永山典子教諭。「マーチングバンドは音楽の活動なので、まずは、音楽の楽しさを知ってもらい、その結果、打ちこんでもらえるように、指導を心がけています。大会で入賞するためにということではなく、子どもたちのできることが一つひとつ増えていくことが喜びとなり、次の意欲になってくれるようになっていく。」



涌谷第一小学校 永山典子教諭



▲山の頂上に吹く風を表現する「ウインドマシーン」を親の会で手作り

指導しています。そのことが涌谷第一小学校のマーチングバンドの良さにつながっているのではないのでしょうか。また、実績の陰に、保護者と地域の協力があると言います。「保護者のサポートが強力で、衣装づくりや小道具づくり、楽器運びは昔から変わらず支援していただいています。地域からの理解と町からの経済的な支援も大きな助けになっています。」

一方で、時代の変化により課題が増大。涌谷第一小学校のスクールバンドとして受け継いでいくことはもちろん、音楽活動をとおした子どもたちの成長のため、原点に立ち返り、今年に入り体制を一新しました。「涌谷第一小学校だけに限ったことではありませんが、赴任してきた当初に比べてメンバー集めが難しくなってきた。練習時間のスリム化と内容の充実を図ったほかに、主担当・副担当の2人体制から、今年は9人の教諭がさまざまな場面で指導にかかわり、児童を支えるチームを校内に作りました。」

涌谷第一小学校の伝統として残していくために、「マーチングバンドは、子どもたちが自分たちで目標を持って取り組んでいくことで、『心豊かな子どもの育成』につながっていくと考えています。今年には初心者が多い中、ここ何カ月かで音が出せる状態になり、なんとか大会に出れるところまでやってきました。そして、音楽を楽しみ、自分を高めていくという本来のマーチング活動において、児童たちは、一生懸命がんばってきました。この活動をこれからも受け継いでいくためには、スクールのバンドとして取り組める体制や表現の仕方を工夫していかなければいけません」と展望を話されました。



▲(右)複数の教諭が指導にあたり(左)外部での演奏会にも立ち会う。子どもたちの活動を学校として見守り、支える。



小さな胸に大きな誇りを抱き、舞台に響け涌谷第一小学校のメロディー



9月22日(木)に全日本小学校バンドフェスティバル宮城県大会(仙台市体育館)、9月24日(土)マーチングバンド・パトントワーリング宮城県大会(グランディ21)に出場し、今年の春から始めたメンバーが多い中、26人は堂々とメロディーを奏でてきました。

涌谷第一小学校のマーチングは、学校の誇りであり、町の誇り。
おそらく今年がマーチングバンドの最大のピンチだったのではないかと振り返ります。
「学校としても受け継いでいかなければいけない事業の一つと位置づけています。今年度に入り、永山先生だけではなく、溝口直樹先生、佐藤仁厚先生、角田崇先生、佐藤政彦先生、山田絵理華先生、川島克也先生、加勢徳寿先生、高橋良典先生がチームとなり、マーチングの良さを訴えかけ、



涌谷第一小学校 柴有司校長

メンバーを26人まで増やし、活動してこられました」。柴校長は、受け継いでいくことの意義を次のように語りました。
「音が出せるようになった、ドリルができるようになった、大会で受賞したなどの一つひとつが、子どもたちに自信を与え、次への意欲につながります。そして、ベテラン組が初心者組の良いモデルとなり、児童同士が教え合う機会となっています。こういった意欲ある行動は、いかに社会が変化しようとして、主体的に判断し行動しようとする『今の時代を生きる力の育成』そのものです。一人でも多くの児童の中に『生きる力』を育んでいくためにも、涌谷第一小学校のマーチングバンドは、これから受け継いでいかなければいけないものです」。

柴校長のマーチングバンドに対する思いは、期せずして力山校長の思いと同じものでした。
涌谷第一小学校のマーチングバンドは、単に音楽的にすばらしいだけでなく、経験した児童の自立心や意欲を育み、人間として豊かにしてきました。
それは、児童たちだけががんばりだけではなく、激励する地域住民や指導する教諭、そして、厳しい練習を支える保護者が一体となり、伝統として積み上げられてきたからこそ成せるもの。まさに、この町の宝であり、誇りの一つです。
岐路に立つこのマーチングバンドを失うことは、この町の未来に対する大きな損失です。
力山校長の思いを受け継ぎそれぞれの立場の人が行動することで、マーチングバンドが豊かな未来を奏で続けてくれることでしょう。